台大日本語文研究第 21 期
2011 年 6 月，頁 223-252
2011-2-14 收稿，2011-6-13 通過刊登

台灣赴日留學生所遭受之「文化衝擊」
—以 1981～2010 年間留學者為對象—

葉淑惠[*]
王敏東[**]

摘要

本稿以問卷調查之方式調查這 30 年間赴日留學之 130 名台灣留學生初次赴日留學時所遭受之文化衝擊（含「學習研究」、「對人關係」、「文化適應」、「日常生活之適應」、「對環境之心理的、身體的適應」、「排遣壓力」、「回國後之適應」），並以 SPSS 就全體、以及「性別」、「留學年代」、「初次留學時之年齡」、「留學期間」、「主修」、「所屬・身分（研究所、短期留學生等）」、「經濟狀況」、「宗教」等的不同做討論。整體而言，留學生的留學目的明確，對留學多給予肯定的評價，但仔細分析各種面向的適應狀況，可以發現性別、年齡、留學期間、是否領取獎學金、有無宗教信仰等不同族群間適應的情形不同，且或多或少都可觀察到留學生在日期間心理或身體的不適應。另外也了解到留學生回國後對自己國家的適應產生問題的情況。

關鍵詞：台灣留學生、文化衝擊、適應

[*] 銘傳大學應用日語學系碩士生
[**] 銘傳大學應用日語學系教授

Culture Shock for Taiwanese Students Studied in Japan Students Studied During 1981-2010

Yeh, Shu-hui*
Wang, Ming-tung**

Abstract

This study interviewed 130 Taiwanese students studied in Japan during the past three decades on the culture shock they experienced upon arrival (including learning status, peer relationship, culture adaption, daily life, psychology and body, stress release, adaption after coming back). The results were analyzed using SPSS based on overall interviewees and their genders, years to study, age on arrival, period, major, identity, economic status and religion. Overall, students had clear goal for study abroad and gave positive comments on the study. Detailed analysis revealed that those students had certain difficulty in adaption on culture shock. Additionally, the adaption difficulty for those students after returning is revealed.

Keywords: Taiwanese students studying abroad, culture shock, adaption

* Graduate student of the Department of Applied Japanese, Ming-Chuang University
** Professor of the Department of Applied Japanese, Ming-Chuang University

台湾人留学生の日本留学における「カルチャーショック」
—1981～2010 年に留学した者を対象として—

葉淑恵*
王敏東**

要旨

本稿は、この 30 年間に日本に留学した台湾人学生 130 名が日本留学で受けたカルチャーショック（「学習研究」、[0]「対人関係」、「文化適応」、「日常生活への適応」、「環境への心理的、身体的適応」、「ストレス解消」、「帰国後の適応」）について、アンケート調査をし、SPSS で全体、および「性別」、「留学した年代」、「初めて留学した年齢」、「留学滞在期間」、「専門」、「所属・身分（大学院、短期留学生など)」、「経済状況」、「宗教」による違いを考察したものである。留学生は留学目的が明確で、留学を肯定的に評価していると考えられるが、適応状況を細かく見ていくと、性別、年齢、滞在期間、奨学金の有無、信仰所持などによって違いが観察でき、留学期間中に多少なりとも心理的または身体的な不適応が見られる。また、留学生の「帰国後の母国への適応」についても問題があることも分かった。

キーワード：台湾人留学生、カルチャーショック、適応

* 銘傳大学応用日本語学科大学院生
** 銘傳大学応用日本語学科教授

台湾人留学生の日本留学における「カルチャーショック」
—1981～2010年に留学した者を対象として—

葉淑恵
王敏東

一、はじめに

近年、台湾から日本に行く留学生が増えている[1]。国際化が重要視されてきた近年、伝統的な、修士号や博士号の取得を目的とする者だけでなく、外国の姉妹校に行く短期交換留学生や、単に生活体験や日本語力を求める者も少なくない。このように、母国と異なった国で生活すると、当然「カルチャーショック」を受けると予想される。

「異文化との接触時に、文化的な違いから受ける精神的な衝撃」[2]を意味する「カルチャーショック」という概念は、1950 年代末～60 年代にアメリカの文化人類学者によって普及したが、今日では文化人類学者以外にもよく用いられるという[3]。日本人が使い始めたのは 1970 年代に入ってからであり[4]、『読売新聞』では 1976 年にはじめて「カルチャーショック」という言葉が用いられ、その後「カルチャーショック」にかかわる範囲（直接もたらす原因や及ぶ範囲など）が拡大している。

心理学では星野（1980）など[5]、また精神医学では大西（1992）などの論考があるが、日本語教育の立場では、たとえば『合格水準 日本語教育能力検定試験　用語集』（2002 新版）や『新・はじめての

---

1 たとえば独立行政法人日本学生支援機構が発表した「平成 21 年度外国人留学生在籍状況調査—留学生受入れ概況」によると、日本に留学する台湾人留学生は平成 20 年に比べて 4.9%増加したという。
2 『情報・知識 imidas』。
3 『日本大百科全書』（小学館）。たとえば、カルチャーショックは社会学の分野でも取り扱われている（森岡他（1993）、DANID JARY & JULIA JARY（2005））。
4 星野（1980：6）。
5 他に Colman Andrew M（2007）、温（2006）などもある。

日本語教育 基本用語事典』(2004) に「カルチャー・ショック」の項目がある[6]。また、飛田 (2001：176) は Oberg (1960：177) のカルチャーショックの定義を「社会で暮らしていくうえでのなじみのある記号 (signs) と表象 (symbols) がすべてなくなることから生じる不安によって起きることである」[7]のように引用しながら、更に、カルチャーショックをその要因から「言語能力・コミュニケーション能力の不足によって起きるカルチャーショック」「対人関係の難しさから起きるカルチャーショック」「価値観・ライフスタイルの違いから起きるカルチャーショック」と大きく 3 つに分けて述べている。在日中の留学生が経験した「カルチャーショック」についての調査としては、倉林・稲村・荒木他 (1984)、上原 (1988)、江村 (1993)、松原・銭 (1996) などがあげられる。

本研究は、台湾人留学生が日本留学において受ける「カルチャーショック」を究明することを目的とする。

二、調査方法

本研究では、台湾人留学生が日本留学において受ける「カルチャーショック」を究明するため、日本に留学した台湾人留学生を対象

---

[6] それぞれ「異文化の中に入った時、それまで知らなかった価値観・行動様式に出会い心理的に不安定になったり、ストレスを感じたりすること。カルチャー・ショックの原因はいろいろ考えられるが、コミュニケーション論の立場からは、自分が発したメッセージが異文化の中で違った形で受け取られてしまう、相手の発したメッセージを自分の文化の文脈で捉えてしまい、そのメッセージの意味を誤って解釈してしまう場合などが考えられる。たとえば、日本の会合で“意見があったら言って下さい”と言われて、正直に自分の考えを述べたために浮いてしまったなどというのはカルチャー・ショックの身近なものだろう。このようなことが重なると、その文化に対して拒否的になったり、食欲不振・頭痛・不眠などの身体的症状が出てくることもある。異文化の中で生活する場合には、多かれ少なかれ、カルチャー・ショックを感じるものである。留学生・外国の人と接する機会の多い人は、どうすれば大きな問題にならずに、彼らがうまく社会に適応していけるかを考えなければならない。」、「自分の慣れ親しんだ文化とは異なった文化に接したときに人が感じるストレスや不適応状態のこと。人が異文化へ移入するとき、多くの場合は期待や心の高まりといった興奮状態が移入直後まで続くが、その後、期待と違う現実に気付き、失望を経験することによって気持ちの落ち込みが見られる。このときに現れる症状がカルチャーショックである」となっている。

[7] 「ここでいう記号と表象とは、日常生活を円滑に送るための決まりごとで」ともある。

としてアンケート調査をする。留学期間内だけでなく、帰国後の「逆カルチャーショック」の実態も一括して検討するため、調査対象はすでに留学を終え、帰国した者とする。具体的な質問の内容に関しては、先行文献で取り上げられた質問を参考にした他、先行文献で触れられていない短期交換留学生を考慮した、新たな質問も設けた。

（一）アンケートの作成

前記倉林・稲村・荒木他（1984）、上原（1988）、江村（1993）、松原・銭（1996）などを参照し、リッカート（Likert）尺度（「非常によくあてはまる」（5）から「全くあてはまらない」（1）という 5 段階評価）を用いて評定してもらう[8]「学習研究」[0]、「対人関係」、「文化適応」、「日常生活の適応」、「環境への心理的、身体的適応」、「ストレス解消」、「帰国後の適応」の 7 項目に分かれたアンケートを作成した。2010 年 9 月、パイロット調査の段階で、八十年代～今世紀にかけて学位取得を目的として渡日した留学生 2 名[9]と、この 5 年以内に学部の短期交換留学生として 1 学期または 1 年間日本に滞在した留学生 3 名[10]、日本語学校で 1 年間勉強していた私費留学生 1 名、といった留学経験者、および、専門家（心理士 3 名[11]、および公衆衛生学専門と統計学専門の大学教師それぞれ 1 名）に見てもらった。

上記のパイロット調査を経て、実際に調査に用いたアンケートは若干形を修正した。

（二）調査対象および時間

2010 年 10 月～2010 年 12 月、日本語学科が設けられている台湾の、日本語学科を有する大学（11 ヶ所）に在籍する日本留学経験者および学生（日本留学経験を問わず）に、日本留学経験（6 ヶ月以上）

---

[8] 上原（1988）は Baker（1981）の FAS (Freshmen Student Adjustment) の尺度を改定したが、基本的にはリッカート（Likert）尺度の一種（「まったく私にあてはまらない」「どちらかというと私にあてはまる」「私にあてはまる」「よく私にあてはまる」の 4 段階と「無回答」の組み合わせ）である。

[9] 2 人とも日本で博士号を取得。

[10] このうち 2 人は同じ大学に所属しており、留学先は各々別々である。

[11] そのうちの 2 人はともに心理関係の修士号を持ち、大学のスクールカウンセラーをしている。他の 1 人は博士号を持ち、大学で助理教授（Assistant Professor）をしている。

を有する知人を紹介してもらい、合計 169 名の台湾人に調査票を送った合計 130 部回収できた（回収率 77%）。アンケートの最初の部分は個人資料であり、この部分の詳細は紙幅の都合で後述する（三、（一）調査結果）「性別」、「初めて留学した年齢」、「留学した年代」、「留学滞在期間」、「専門」、「所属・身分（大学院、短期留学生など）」、「経済状況」、「宗教」の各節で提示する。

三、調査

本研究の調査では、統計ソフト SPSS（SPSS12 中国語版）を用いデータ分析を行う。また、今回の調査の信頼性は表 1 の通りである。

表 1 本調査における信頼性

項目	問題数	Alpha 値	標準化 Alpha
第一項目（学習研究）	18 問	0.824	0.821
第二項目（対人関係）	21 問	0.824	0.831
第三項目（文化適応）	10 問	0.740	0.746
第四項目（日常生活の適応）	15 問	0.724	0.745
第五項目（環境への心理的、身体的適応）	19 問	0.895	0.898
第六項目（ストレス解消）	10 問	0.604	0.614
第七項目（帰国後の適応）	11 問	0.711	0.633

（一）調査結果

以下、「全体的な傾向」、そして 2 組、または 2 組以上の標本について平均値に対する有意差があるかどうかに関してそれぞれ T 検定（「性別」、「専門」（文学部とその他）、「経済状況」（奨学金の有無）、「宗教」（宗教の有無））、または One way-ANOVA（「初めて留学した年齢」、「留学した年代」、「留学滞在期間」、「所属・身分（大学院、短期留学生など）」）を行い、各小節を立てて検討する。

1、全体的な傾向

各項目における全体的な傾向は表 2 の通りである[12]。

[12] 実際に調査に用いたアンケートは中国語のものである。

表 2 各項目における全体的な傾向

第一項目（学習研究 平均3.32）	
※1.留学期間中、私は勉強する気があまりなかった。[13]	(3.55) [14]
2.留学期間中、研究や勉強が楽しいと感じた。	(3.81)
3.留学期間中、私は研究や勉強に一生懸命努力していた。	(3.52)
※4.留学期間中、私は日本での研究や勉強を続けていく自信がなかった。	(3.39)
5.私は日本への留学目的と研究目的がよく把握している。	(3.95)
※6.留学期間中、私は日本での自分の研究や勉強に価値があるかどうか疑問に思った。	(3.48)
※7.留学期間中、私は自分の研究（研究目的）や勉強が思うように進まなかった。	(3.38)
8.留学期間中、私は自分の取った授業に満足していた。	(3.67)
※9.留学期間中、私は自分の専門分野の授業が理解できず、イライラした。	(3.02)
10.私は自分の専門分野の授業で、日本語で研究発表をしたり、討論したりすることに自信があった。	(3.22)
※11.私は自分の専門分野の本や資料を読んでも分からないので困っていた。	(2.90)
※12.私は日本語で自分の意思を十分表現できない。	(3.06)
13.困難に遭った時、クラスメートや先生に相談できる。	(3.95)
※14.留学期間中、やり方に適応できない授業があった。	(3.06)
※15.留学期間中、テストなどの際、非常に困った。	(3.18)
※16.留学期間中、発表やゼミなどにあたった時、非常に困った。	(2.68)
17.留学期間中、（日本語の）授業に自信を持って臨むことができた。	(2.77)
18.留学期間中、私は日本で学位を取得する自信があった。	(3.14)
第二項目（対人関係 平均3.40）	
1.私は学校に何でも話せる日本人学生の友達がいた。	(2.92)
2.私は何でも話せる留学生（他国の留学生や台湾の留学生等）の友達がいる。	(4.15)
3.私は日本人の異性の友達がいる。	(2.33)
※4.私は、所属する学科の学生たちに気楽に話しかけることができなかった。	(3.40)
※5.私は自分の指導教官に親しく相談することができなかった。	(3.38)
※6.私は、チューターや先輩に気楽に話しかけることができなかった。	(3.68)
※7.私は所属する学科の先生たちに気楽に話しかけることができなかった。	(3.58)
※8.私は学校（留学先）の事務の人たちに気楽に話しかけることができなかった。	(3.78)
9.私は学校（留学先）に私の研究（勉強）について、充分に話し合える教師がいて満足している。	(3.24)
※10.留学期間中、私は対人関係の問題で悩んでいた。	(3.34)
11.私の学科（所属）の学生と先生は私の研究（勉強）を熱心に助けてくれていた。	(3.95)
12.私は日本人の友達の家を訪問したことがよくある。	(2.84)
13.日本人の友達がよく私の家へ遊びに来た。	(2.38)
※14.私は、日本人学生と一緒に集団活動（パーティー、ダンス、ピクニック、ミーティング、スポーツ等）をする機会が少なくて不満だった。	(3.52)
※15.私は日本人とはあまり付き合おうとは思わなかった。	(4.30)
16.日本人は台湾にいいイメージを持っている思う。	(3.72)

[13] ※は逆転項目であることを示す。以下同様。
[14] ( )内の数値は平均値を示す。以下同様。

17.留学期間中、日本人が私をどう思うか非常に気になった。	(3.33)
18.私の性格は明るくて、友達と付き合うのが好きだ。	(3.45)
19.私は心配性というよりは、呑気な性格だ。	(3.12)
20.私は、感情的というよりは理性的だ。	(3.37)
21.全体的にこの学校（留学先）での人間関係に満足している。	(3.55)
第三項目（文化適応 平均 3.25）	
※1.私は日本人の挨拶や礼儀が分からなくて困ったことがある。	(3.24)
※2.私は外国人で目立つため、自分の行動が制限されているように感じていた。	(2.41)
※3.日本人は集団意識が強いので、私が彼らの集団に同じように参加することは難しかった。	(2.83)
※4.私は日本人の表現が本音でなく、建前なので時々イライラすることがあった。	(2.92)
5.私は日本社会の特性が理解できる。	(3.68)
6.私は日本人の特性が理解できる。	(3.71)
7.日本に行く前に、日本についての情報はたくさん得ていた。	(3.71)
8.日本と母国との文化的差異（ずれ、差）は小さいと思う。	(2.58)
9.日本人の考え方や価値観を受け入れられる。	(3.57)
※10.日本の生活にすっかり適応してしまい、台湾文化を認められなくなったことに危機感を抱いた。	(3.89)
第四項目（日常生活の適応 平均 3.48）	
1.日本の住まいの住み心地は非常に快適で満足していた。	(4.15)
2.住まいの衛生情況は非常に良かった。	(4.39)
3.私の住んでいた所の治安状態は非常によかった。	(4.12)
4.留学期間中、私は近所との付き合いがとても順調だった。	(3.55)
5.留学先（日本）の気候に慣れた。	(3.74)
※6.家賃が高くて生活が苦しかった。	(3.06)
※7.留学期間中、私は経済的にとても困っていた。	(3.27)
8.留学期間中、多くの時間をアルバイトに費やした。	(2.01)
※9.留学期間中、日本のかわいいものやかっこいいものを、経済的な理由で買えないことがよくあった。	(2.61)
10.留学期間中、交通が便利だと思っていた。	(3.96)
11.留学期間中、食事面で口に合わないことがあった。	(4.12)
※12.留学期間中、日本での食事の値段が高いと思っていた。	(2.05)
※13.留学期間中、自炊が面倒だとよく思った。	(3.43)
※14.留学期間中、台湾の家族のことをいつも気にかけていた。	(4.33)
15.全体として、私は当地での生活に満足している。	(3.47)
第五項目（環境への心理的、身体的適応 平均 4.02）	
※1.留学期間中、健康上の問題があった。	(3.77)
※2.留学期間中、よく医者に見てもらった。	(4.28)
※3.留学期間中、調子が悪くなり、医者に診察してもらったにもかかわらず、原因が判明しなかったことがある。	(4.20)
※4.留学期間中、体重の急激な増減があった。	(4.67)
※5.留学期間中、疲れがひどかった。	(3.73)
※6.留学期間中、よく眠れなかった。	(4.03)
※7.留学期間中、よくホームシックにかかった。	(3.66)
※8.留学期間中、イライラしがちだった。	(3.92)
※9.留学期間中、寂しくなることがよくあった。	(3.49)
※10.留学期間中、性格（人柄）が変わった。	(3.40)
※11.留学期間中、人生に希望を持てなかったり物事に対して全然興味が湧いてこなかったりしたことがあった。	(4.51)
※12.留学期間中、風邪気味のままなかなか治らないようなことがよくあった。	(4.18)
※13.留学期間中、不安や緊張で健康上の問題（たとえば、下痢、胃痛、頭痛など）を来すことがあった。	(3.93)
※14.留学期間中、理由なき不安や恐怖を抱いたことがあった。	(4.15)
※15.留学期間中、気分が落ち込んだり憂鬱になったりしたことがあった。	(3.75)

※16.留学期間中、興奮しやすく、物事を誇張して話すような状況があった。	(4.08)
※17.留学期間中、情緒不安定で、悩んだことがあった。	(4.01)
※18.留学期間中、私はいくつかの場所（たとえば：高所、閉所、人混みの場所や、家を離れた所等）に対して、非常に恐怖心を抱いたことがあった。	(4.43)
※19.留学期間中、私は生活の変化のため、情緒不安定となり、勉強や仕事、人間関係に支障を来したことがある。	(4.13)
第六項目（ストレス解消 平均 2.80）	
1.留学期間中、よくインターネットや電話、手紙などを利用して、家族や友達と連絡していた。	(4.15)
2.留学期間中、気晴らしに外出することが多かった。	(3.78)
3.留学期間中、よく自分の趣味に興じていた。	(3.99)
4.留学期間中、ストレス解消のために運動することがよくあった。	(2.71)
5.留学期間中、わざと自分を忙しくさせ、悩みを忘却しようとしたことがある。	(3.25)
6.留学期間中、心理カウンセリングを受けたことがある。	(1.38)
7.留学期間中、困難に遭った時、いつも泣いたり、食べたり、寝たり、買い物をしたりした。	(2.58)
8.留学期間中、宗教に頼ることでストレスを解消しようとしたことがある。	(1.58)
9.留学期間中、休暇を取って、暫くのんびりしたことがあった。	(2.87)
10.留学期間中、ストレス解消のために、たばこを吸ったりお酒を飲んだりすることがあった。	(1.72)
第七項目（帰国後の適応　平均 3.02）	
1.日本に行って来て人生観が変わった。	(3.97)
2.帰国後、また日本へ行きたいと思った。	(4.29)
3.帰国後、健康上の問題が日本にいた時より改善された。	(2.92)
※4.帰国後、日本より脂っこい台湾の食べ物が口に合わなくなった。	(3.04)
※5.帰国後、台湾の居住環境に慣れない。	(2.37)
※6.帰国後、台湾の治安を不安に感じる。	(2.87)
※7.帰国後、台湾の天候に適応できないと感じる。	(2.74)
8.帰国後、台湾人の考え方や行動様式（たとえば、時間感覚やサービスの態度）に慣れないと感じる。	(2.31)
※9.帰国後、台湾のテスト制度に適応できなくなった。	(2.99)
※10.帰国後、台湾での授業のやり方に適応できない。	(3.20)
※11.帰国後、台湾の交通事情に適応できない。	(2.56)

第一項目「学習研究」に関して最も留学生が悩まされたのは第 16 問「留学期間中、発表やゼミなどにあたった時、非常に困った。」（平均 2.68 で[15]、約半分の 47.70%の人が 1 の「全くあてはまらない」と 2 の「どちらかというとあてはまらない」をマークした）である。他に、「留学期間中、（日本語の）授業に自信を持って臨むことができた。」（第 17 問）、「私は自分の専門分野の本や資料を読んでも分からないので困った。」（第 11 問）も平均 3.00 未満の数値にとどまっている。が、この項目における全 18 問の平均値は 3.32 もあり、平

[15] 小数点以下 2 位を四捨五入して表す。以下同様。

均数が 3.00 以上の質問が 15 問と 8 割以上に達する。よって、全体としては留学目的が明確で、日本への留学を肯定的に評価し、研究や勉強が楽しかったと考えている、という結果に結び付けられよう。

第二項目「対人関係」の平均数は 3.40 で、第一項目よりも平均値が高く、全体として、対人関係には満足しているように見えるが、各々の質問について詳細に見ていくと、ばらつきが大きいことが見て取れる。たとえば、友人関係に関して「私は学校に何でも話せる日本人学生の友達がいた。」（第 1 問）という質問の平均値は 2.92 である。「日本人の友達がよく私の家へ遊びに来た。」（第 13 問）という質問の平均値はなおさら低い数値の 2.38 である。この 2 つの質問は平均値が 3.00 以下で、日本人学生の友人との交流があまりなかったことが読み取れる。

第三項目「文化適応」の平均数は 3.25 である。全 10 問中、平均数が 3.00 以下の質問は 4 問ある。たとえば「私は外国人で目立つため、自分の行動が制限されているように感じていた。」（第 2 問）と、「日本人が集団意識が強いので、私は彼らの集団に同じように参加することは難しかった。」（第 3 問）の平均数はそれぞれ 2.41 と 2.83 である。つまり、自分が外国人であることを意識しすぎたり、日本人と同じ行動を取ることができなかったりするという点で、不適応を来した留学生がいるようである。

第四項目「日常生活への適応」の平均値は 3.48 である。全 15 問中、平均数が 3.00 以下の質問は 3 問ある。この 3 つの質問は日本の物価に集中している。つまり、物価が台湾人留学生の悩みの種なのである。

第五項目「環境への心理的、身体的適応」は、得点が高いほど適応度が低く、得点が低いほど適応度が高いことを示すようにアンケートで設問されている。が、分析する際、他の項目と同じように得点が高いほど適応度が高く、得点が低いほど適応度が低くなるように処理したら、この項目の平均値は 4.02 となった。得点が最も低いのは「留学期間中、性格（人柄）が変わった。」（3.40）で、以下順

次「留学期間中、寂しくなることがよくあった。」(3.49)、「留学期間中、よくホームシックにかかった。」(3.66)、「留学期間中、疲れがひどかった。」(3.73)、「留学期間中、気分が落ち込んだり憂鬱になったりしたことがあった。」(3.75)、「留学期間中健康上の問題があった。」(3.77)、「留学期間中、イライラしがちだった。」(3.92)、「留学期間中、不安や緊張で健康上の問題(たとえば、下痢、胃痛、頭痛など)を来すことがあった。」(3.93)となっており、いずれも平均値の 4.02 を下回っている。これで、台湾人留学生には日本留学期間中に多少なりとも心理的または身体的な不適応が見られることが分かる。

第六項目「ストレス解消」の平均数は 2.80 である。各々の質問について詳細に見ていくと、何か悩みがある時には、「インターネットや電話、手紙などを利用して、家族や友達と連絡」する方法が最も多く利用されている。また、「自分の趣味に興じる」(3.99)、「気晴らしに外出する」(3.78)などもストレス解消に用いられている。

第七項目「帰国後の適応」の平均値は 3.02 である。全 11 問中、平均数が 3.00 以下の質問は 7 問もあり、とくに「帰国してから、台湾人の考え方や行動様式(たとえば、時間感覚やサービスの態度)に慣れないと感じる。」がトップの座を占めている(2.31)。全体的に、台湾人留学生は基本的に帰国後の適応の問題を抱えており、今後より深くかつ長期的に留学生の帰国後の適応状況を観察する必要があることを示唆している。

2、性別

性別(男:33 人、女:97 人)については、T 検定の結果(表 3 に提示)が示すように、以下の男女差が読み取れる。

表 3 台湾人留学生間適応状況比較（性別要因）—領域別 T 検定

項目	問	項目内容	M		SD		T	DF	P
			男性 (N=33)	女性 (N=97)	男性 (N=33)	女性 (N=97)			
一	17	留学期間中、(日本語の)授業に自信を持って臨むことができた。	3.03	2.68	.73	1.03	2.13	128	.036
二	2	私は何でも話せる留学生(他国の留学生や台湾の留学生等)の友達がいる。	3.88	4.24	.93	.81	-2.12	128	.037
	11	私の学科(所属)の学生と先生は私の研究(勉強)を熱心に助けてくれていた。	3.67	4.05	.69	.87	-2.30	128	.023
	18	私の性格は明るくて、友達と付き合うのが好きだ。	3.15	3.55	.83	.99	-2.06	128	.042
	19	私は心配性というよりは、呑気な性格だ。	2.79	3.24	.74	1.13	-2.60	128	.011
三	3	私は外国人で目立つため、自分の行動が制限されているように感じていた。	3.18	3.73	1.21	1.09	-2.44	128	.016
五	2	留学期間中、よく医者に見てもらった。	4.55	4.20	.62	.92	-2.03	128	.044
六	1	留学期間中、よくインターネットや電話や手紙などを利用して、家族や友達に連絡していた。	3.82	4.27	1.10	.86	-2.41	128	.017
	4	留学期間中、ストレス解消のために運動することがよくあった。	3.12	2.57	1.14	1.12	.06	128	.010
	7	留学期間中、困難に遭ったとき、いつも泣いたり、食べたり、寝たり、買い物をしたりした。	2.06	2.75	1.06	1.22	-2.91	128	.004
	10	留学期間中、ストレス解消のために、たばこを吸ったりお酒を飲んだりすることがあった。	2.33	1.52	1.36	1.09	3.13	128	.003
七	4	帰国後、日本より脂っこい台湾の食べ物が口に合わなくなった。	3.50	2.89	1.19	1.16	2.57	128	.011

第一項目「学習研究」[0]では「留学期間中、(日本語の) 授業に自信を持って臨むことができた。」という 1 問だけに顕著な差が観察できた (一番右の欄の数値が 0.05 以下となっている)。この質問に関しては、(一番右の欄の数値が正数なので)男性の方が女性より「日本の授業に出る自信」があると分かる。

第二項目の「対人関係」について、「私は何でも話せる留学生 (他国の留学生や台湾の留学生等) の友達がいる。」「私の学科 (所属) の学生と先生は私の研究 (勉強) を熱心に助けてくれていた。」「私の性格は明るくて、友達と付き合うのが好きだ。」「私は心配性というよりは、呑気な性格だ。」という 4 問に顕著な男女差が示されている。表における真中の欄の T が負数となっていることより、男性より、女性の方が明るくて、友達がいて、先生たちが熱心に助けてくれていると強く思っている、ということである。

第三項目「文化適応」では、「私は外国人で目立つため、自分の行動が制限されているように感じていた。」と思う割合は男性より女性の方が高いということが分かった。

第五項目「環境への心理的、身体的適応」は「留学期間中、よく医者に見てもらった。」女性が比較的多いという結果になっている。

第六項目「ストレス解消」については、「インターネットや電話、手紙などを利用して、家族や友達と連絡」と「泣いたり、何かを食べたり、寝こんだり、買い物をしたり」するのが女性、「運動」と「たばこを吸ったりお酒を飲んだり」するのが男性に多いストレスの解消法だと分かる。

第七項目の「帰国後の適応」においては「帰国後、日本より脂っこい台湾の食べ物が口に合わなくなった。」と思う男性が多いことが分かる。

これで、男女各々ストレスを抱えているが、発散する方法は異なっていることが明らかになった。ちなみに、上記の結果は、他人の目を意識しすぎ、友達に悩みを相談し、何かあったら泣いたりすること、などが女性特有の性質だという従来の研究結果と一致してい

る[16]。

3、初めて留学した年齢による違い

日本に初めて留学した年齢は 20 歳未満 14 人、21～25 歳 78 人、26～30 歳 27 人、31～40 歳 8 人、41～50 歳 3 人となっている。

この部分について One way-ANOVA を用いて処理した結果、表 4 のようになった。

表 4　初めて留学した年齢別台湾人留学生間適応状況比較
（初めて留学した年齢要因）―領域別 One way-ANOVA

項目	問	項目内容	(I)年齢/(J)年齢	平均数差異(I-J)	標準誤	P	95%信賴区間	
							下限	上限
一	3	留学期間中、私は研究や勉強に一生懸命努力していた。	26～30 歳/21～25 歳	.68*	.225	.030	.04	1.32
二	7	私は所属する学科の先生たちに気楽に話しかけることができなかった。	41～50 歳/20 歳未満	1.81*	.621	.042	.04	3.58
三	7	日本に行く前に、日本についての情報はたくさん得ていた。	31～40 歳/21～25 歳	-1.05*	.365	.045	-2.10	-.01
			31～40 歳/26～30 歳	-1.37*	.395	.007	-2.50	-.25
	8	日本と母国との文化的差異(ずれ、差)は小さいと思う。	41～50 歳/31～40 歳	2.00*	.667	.033	.09	3.91
五	11	留学期間中、人生に希望を持てなかったり物事に対して全然興味が湧いてこなかったりしたことがあった。	26～30 歳/20 歳未満	.74*	.249	.037	.02	1.45
六	2	留学期間中、気晴らしに外出することが多かった。	21～25 歳/41～50 歳	1.60*	.546	.040	.04	3.16
	5	留学期間中、わざと自分を忙しくさせ、悩みを忘却しようとしたことがある。	31～40 歳/26～30 歳	1.25*	.434	.047	.01	2.49
	10	留学期間中、ストレス解消のために、たばこを吸ったりお酒を飲んだりすることがあった。	31～40 歳/21～25 歳	1.27*	.443	.048	.01	2.54

[16] 島田（2008：66～67）、Jean Baker Miller（1992）、OSHO（2005）など。

七	2	帰国後、また日本へ行きたいと思った。	20 歳未満 /26～30 歳	.78*	.257	.029	.05	1.52
			20 歳未満 /31～40 歳	1.11*	.346	.018	.12	2.10
	5	帰国後、台湾の居住環境に慣れない。	31～40 歳 /20 歳未満	-2.20 *	.517	.000	-3.67	-.72
			31～40 歳 /21～25 歳	-1.78 *	.433	.001	-3.02	-.54
			31～40 歳 /26～30 歳	-1.94 *	.470	.001	-3.28	-.60
			31～40 歳 /41～50 歳	-2.79 *	.790	.006	-5.05	-.53
	6	帰国後、台湾の治安を不安に感じる。	31～40 歳 /20 歳未満	-1.91	.491	.002	-3.31	-.51
			31～40 歳 /21～25 歳	-1.18 *	.411	.050	-2.35	.00
			31～40 歳 /26～30 歳	-1.53 *	.446	.008	-2.81	-.26
	7	帰国後、台湾の気候に適応できないと感じる。	31～40 歳 /20 歳未満	-1.64 *	.510	.016	-3.10	-.18
			31～40 歳 /26～30 歳	-1.70 *	.463	.003	-3.13	-.38

まず、第一項目の「留学期間中、私は研究や勉強に一生懸命努力していた。」に年齢層（「21～25 歳」と「26～30 歳」という 2 つのグループ）による顕著な差（「有意確率」の数値が 0.05 以下）が見られ、「21～25 歳」の人は「26～30 歳」の人より満足している程度が低い（95%信頼区間が負数で、後者（前者（(I) 年齢）が（J) 年齢）より低い)、つまり二十代前半の人の適応状況が比較的悪い、ということが分かった。

第二項目の「私は所属する学科の先生たちに気楽に話しかけることができなかった。」については、「20 歳未満」よりも、「41～50 歳」の人の方が困難を感じている。

第三項目においては、「日本に行く前に、日本についての情報はたくさん得ていた。」と考えている人は三十代より二十代に多く、「日本と母国との文化的差異（ずれ、差）は小さいと思う。」と考えている人は三十代より四十代に多いということが観察できた。

第五項目の「環境への心理的、身体的適応」について、26～30 歳の人は「留学期間中、人生に希望を持てなかったり物事に対して全

然興味が湧いてこなかったりした」傾向がある。

留学期間中のストレス解消の方法として（第六項目)、「気晴らしに外出する」と答えたのは 41～50 歳よりも 21～25 歳の人に多く、「わざと自分を忙しくさせ、悩みを忘却しようとした」と答えたのは 26～30 歳より 31～40 歳の人に多く、「たばこを吸ったりお酒を飲んだりしてストレスを解消しようとした」と答えたのは 21～25 歳の人より 31～40 歳の人に多い。

第七項目の「帰国後の適応」では、まず、26～40 歳の人に比べて、20 歳未満の人の方が「帰国後、また日本へ行きたいと思った。」を選んだ人が多い。また、31～40 歳の人は他の年齢層の人より「帰国後、台湾の居住環境に慣れない」そして「帰国後、台湾の治安を不安に感じる」と思っている率が低い。なお、31～40 歳より、20 未満、26～30 歳の人が帰国後、台湾の気候に適応できないと感じている。[0]この結果から、31～40 歳の人は帰国後の「逆カルチャーショック」が少ないことが分かる。

4、留学年代

留学生が(日本に初めて)留学した時期は 1981～1985 年 2 人、1986～1990 年 7 人、1991～1995 年 9 人、1996～2000 年 10 人、2001～2005 年 18 人、2006～2010 年 79 人、そして無回答 5 人となっている。以下（表 5)、留学生の留学年代とカルチャーショックとの関係を One way-ANOVA で検証する。

表 5 初めて留学した年代別台湾人留学生間適応状況比較

（初めて留学した年代要因）―領域別 One way-ANOVA

項目	問	項目内容	(I)年代 /(J)年代	平均数差異(I-J)	標準誤	P	95%信頼区間	
							下限	上限
一	4	留学期間中、私は日本での研究や勉強を続けていく自信がなかった。	1996～2000 年 /2001～2005 年	1.52*	.484	.044	.02	3.02
			1996～2000 年 /2006～2010 年	1.29*	.412	.044	.02	2.57
三	5	私は日本社会の特性が理解できる。	1996～2000 年 /2006～2010 年	.93*	.284	.029	.05	1.81

四	6	家賃が高くて生活が苦しかった。	1996～2000 年/1981～1985 年	-3.20*	.873	.008	-5.91	-.49
			1996～2000 年/2006～2010 年	-1.29*	.378	.019	-2.46	-.12
	8	留学期間中、多くの時間をアルバイトに費やした。	1981～1985 年/2006～2010 年	2.63*	.843	.048	.01	5.24
五	12	留学期間中、風邪気味のままなかなか治らないようなことがよくあった。	1991～1995 年/2001～2005 年	1.72*	.443	.003	.35	3.10
			1991～1995 年/2006～2010 年	1.35*	.382	.012	.16	2.53
六	1	留学期間中、よくインターネットや電話、手紙などを利用して、家族や友達と連絡していた。	1981~1985 年/1996~2000 年	-2.30*	.665	.016	-4.36	-.24
			1981～1985 年/2006～2010 年	-2.42*	.615	.003	-4.33	-.51
七	9	帰国後、台湾のテスト制度に適応できなくなった。	1986～1990 年/2006～2010 年	3.01*	.785	.004	.58	5.45
	10	帰国後、台湾での授業のやり方に適応できない。	1986～1990 年/2006～2010 年	3.15*	.827	.005	.59	5.72

第一項目については、1996～2000 年に日本に留学した人は 2001～2010 年に留学した人ほど「留学期間中、日本での研究や勉強を続けていく自信がなかった。」ことが分かる。しかし、1996～2000 年に日本に留学した人は 2006～2010 年に留学した人より「日本社会の特性が理解できる」（第三項目）。また、1996～2000 年に日本に留学した人は 1981～1985 または 2006～2010 年に留学した人ほど、「家賃が高くて生活が苦しかった」（第四項目）と感じていない。同じく第四項目の質問であるが、1981～1985 に留学した人は 2006～2010 年に留学した人より「多くの時間をアルバイトに費やした」。

第五項目では、1991～1995 年に留学した人は 2001～2010 年に留学した人より「留学期間中、風邪気味のままなかなか治らないような」状況がひどい。

1981～1985年に留学した人は1996～2000年および2006～2010年に留学した人に比べると、「ストレス解消」の方法として「留学期間中、インターネットや電話、手紙などを利用して、家族や友達と連絡していた」比率が低い。これは、八十年代前半にはインターネットが今のように発達していなかったことや、当時まだ国際電話代が高かったことなどに関係があると思われる。

最後に、1986～1990年に留学した人は2006～2010年に留学した人と比べて、「帰国後、台湾のテスト制度に適応できなくなった」または「帰国してから、台湾での授業のやり方に適応できない」と考える者が多い。

5、留学滞在期間

留学生の滞在期間は半年～一年53人、一～二年34人、二～三年9人、三～四年10人、四～五年3人、五～六年4人、六～七年7人、七年以上6人、そして無回答4人となっている。以下（表6)、この部分はOne way-ANOVAを用いて検討する。

表6 初めて留学滞在期間の台湾人留学生間適応状況比較

（初めて留学滞在期間要因）―領域別 One way-ANOVA

項目	問	項目内容	(I)期間 /(J)期間	平均数差異 (I-J)	標準誤	P	95%信頼区間	
							下限	上限
二	1	私は学校に何でも話せる日本人学生の友達がいた。	半年～一年 /七年以上	-1.75*	.526	.033	-3.43	-.07
三	8	日本と母国との文化的差異(ずれ、差)は小さいと思う。	二年～三年/ 六年～七年	1.73*	.491	.017	.16	3.30
四	8	留学期間中、多くの時間をアルバイトに費やした。	半年～一年 /七年以上	-1.75*	.496	.017	-3.33	-.16
	11	留学期間中、食事面で口に合わないことがあった。	三年～四年/ 六年～七年	1.46*	.453	.047	.01	2.91
六	1	留学期間中、よくインターネットや電話や手紙などを利用して、家族や友達に連絡していた。	七年以上/ 半年～一年	-1.32*	.389	.026	-2.56	-.08
			七年以上/ 二年～三年	-1.67*	.476	.018	-3.19	-.15

第二項目の「私は学校に何でも話せる日本人学生の友達がいた。」においては、日本滞在七年以上の留学生の方が半年～一年滞在の留学生よりも適応状況が良好であることが分かる。また、第三項目「日本と母国との文化的差異（ずれ、差）は小さいと思う」では、二年～三年日本滞在の留学生が六年～七年滞在の留学生より満足しているという結果が読み取れる。第四項目「日常生活の適応」では、「留学期間中、多くの時間をアルバイトに費やした。」と「留学期間中、食事面で口に合わないことがあった。」という 2 問が滞在期間と関係があり、前者は七年以上滞在の人、後者は三年～四年滞在の人にとってより大きな問題となったと分かる。第六項目の「ストレス解消」を見ると、七年以上滞在した人よりも半年～一年もしくは二年～三年滞在した人の方が「留学期間中、よくインターネットや電話や手紙などを利用して、家族や友達」と連絡していた」割合が明らかに高いことが分かる。

6、専門別

今回の調査では、留学生の留学先は文学部（57 人）をはじめとし、理（1 人）、工（5 人）、法（2 人）、商（14 人）、教育学部（4 人）など広範囲に渡っており、各学部に所属する人数の差が大きい。このような数値で One way-ANOVA を用いて処理してあまり意味がないので、この節は学生の専門を「文学部」（57 人）と「文学部以外」（73 人）という 2 グループに分け、T 検定を行うことにした結果、表 7 のようになった。

表 7 台湾人留学生間適応状況比較（専門別要因）

—領域別 T 検定

項目	問	項目内容	M		SD		T	DF	P
			文学部 (N=57)	文学部以外 (N=73)	文学部 (N=57)	文学部以外 (N=73)			
二	2	私は何でも話せる留学生(他国の留学生や台湾の留学生	4.32	4.01	.711	.935	2.024	128	.045

		等)の友達がいる。							
三	9	日本人の考え方や価値観を受け入れられる。	3.77	3.42	.831	.912	2.201	128	.030
四	8	留学期間中、多くの時間をアルバイトに費やした。	1.58	2.32	.925	1.332	-3.713	128	.000
	9	留学期間中、日本のかわいいものやかっこいいものを、経済的な理由で買えないことがよくあった。	3.19	3.55	1.076	.958	-1.985	128	.049
六	2	留学期間中、気晴らしに外出することが多かった。	4.09	3.53	.892	.959	3.367	128	.001
	3	留学期間中、よく自分の趣味に興じていた。	4.21	3.82	.840	.948	2.437	128	.016
七	9	帰国後、台湾のテスト制度に適応できなくなった。	4.04	4.90	2.026	2.103	-2.387	128	.019
	10	帰国後、台湾での授業のやり方に適応できない。	3.84	4.78	2.136	2.181	-2.463	128	.015

「私は何でも話せる留学生（他国の留学生や台湾の留学生等）の友達がいる」「日本人の考え方や価値観を受け入れられる」「留学期間中、気晴らしに外出することが多かった」「留学期間中、よく自分の趣味に興じていた」においては文学部所属の学生が高値を示すのに対して、「留学期間中、多くの時間をアルバイトに費やした」「留学期間中、日本のかわいいものやかっこいいものを、経済的な理由で買えなかった」「帰国後、台湾のテスト制度に適応できなくなった」「帰国してから、台湾での授業のやり方に適応できない」は文学部以外の学生の値が高い、となっている。つまり、文学部の学生は「対人関係」、「文化適応」、「ストレス解消」の面での問題が少なく、文学部以外の学生は経済的なことや、帰国後の学校における授業やテストへの適応に問題があった、と分かる。この結果だけを見ると、総体的に文学部の学生は留学に関しては適応能力が高い、と言えそうである。

7、所属・身分（大学院、短期留学生など）

今回調査を受けた留学生の留学時の所属・身分は表 8 の通りである。

表 8 留学生の留学時の所属・身分

大学							日本語学校	研究生（修士課程）	その他	無回答
学部		大学院				別科				
		修士課程		博士課程						
交換留学生	非交換留学生	交換留学生	非交換留学生	交換留学生	非交換留学生					
59	7	2	10	0	2	6	21	14	8	1

この節では One way-ANOVA を行い検討する。結果は表 9 の通りである。

表 9 所属・身分の台湾人留学生間適応状況比較（身分要因）

—領域別 One way-ANOVA

項目	問	項目内容	(I)身分/(J)身分	平均数差異 (I-J)	標準誤	p	95%信頼区間	
							下限	上限
一	3	留学期間中、私は研究や勉強に一生懸命努力していた。	大学交換留学生/修士課程の研究生	-.97*	.290	.039	-1.92	-.02
二	6	私は、チューターや先輩に気楽に話しかけることができなかった。	大学院交換留学生/修士課程の研究生	2.57*	.757	.033	.09	5.05
四	6	家賃が高くて生活が苦しかった。	日本語学校/修士課程の研究生	1.33*	.391	.032	.05	2.61
	7	留学期間中、私は経済的にとても困っていた。	日本語学校/修士課程の研究生	1.52*	.371	.003	.31	2.74
	8	留学期間中、多くの時間をアルバイトに費やした。	日本語学校/大学交換留学生	1.31*	.288	.000	.37	2.25
			日本語学校/修士課程の研究生	1.67*	.391	.001	.39	2.95
	9	留学期間中、日本のかわいいものやかっこいいものを、経済的な理由で買えないことがよくあった。	日本語学校/大学院交換留学生	2.40*	.724	.043	.03	4.78
			日本語学校/修士課程の研究生	1.19*	.338	.022	.08	2.30
七	5	帰国後、台湾の居住環境に慣れない。	大学院交換留学生/大学非交換留学生	-3.71*	.952	.006	-6.83	-.60

			大学院交換留学生/博士非交換留学生	-4.00*	1.187	.036	-7.89	-.11
	9	帰国後、台湾のテスト制度に適応できなくなった。	大学交換留学生/修士課程の研究生	-3.29*	.517	.000	-4.98	-1.60
	10	帰国後、台湾での授業のやり方に適応できない。	大学交換留学生/修士課程の研究生	-3.30*	.551	.000	-5.10	-1.49

まず、(修士課程の)研究生は、大学交換留学生より、留学期間中、研究や勉強に一生懸命努力しており(第一項目)、チューターや先輩に気楽に話しかけることができた(第二項目)ことが分かる。しかし同時に、帰国後、台湾のテスト制度や授業のやり方に適応できなくなった、ということも示されている(第七項目)。

また、大学院の交換留学生よりも、大学または博士課程の非交換留学生の方が(第七項目の)帰国後、台湾の居住環境に慣れないと感じる割合が多いことが分かる。

一方、日本語学校の学生は修士課程の研究生よりも、「家賃が高くて生活が苦しかった」「留学期間中、経済的にとても困っていた」「留学期間中、日本のかわいいものやかっこいいものを、経済的な理由で買えなかった」(以上第四項目)と思い、「留学期間中、多くの時間をアルバイトに費やした」。また、日本語学校の学生は、大学の交換留学生と比べても、「留学期間中、日本のかわいいものやかっこいいものを、経済的な理由で買えなかった」と「留学期間中、多くの時間をアルバイトに費やした」という2問で顕著な差が見られ、日本語学校の学生は経済的な面で比較的不自由であることが改めてうかがえる。

8、経済状況

留学費用の負担者は私費(家族、親戚、友人などの負担を含む)90人、日本の奨学金32人、台湾の奨学金6人、会社2人となっている。私費留学生(90人)と、奨学金を得て留学した人(40人)との間でT検定を行った結果、表10の通りである。

表 10 台湾人留学生間適応状況比較（経済要因）—領域別 T 検定

項目	問	項目内容	M		SD		T	DF	P
			私費生 (N=90)	奨学生 (N=40)	私費生 (N=90)	奨学生 (N=40)			
一	1	留学期間中、私は勉強する気があまりなかった。	2.59	2.15	1.059	1.12	2.141	128	.034
	2	留学期間中、私は研究や勉強に一生懸命努力していた。	3.38	3.85	.978	1.099	-2.445	128	.016
	10	私は自分の専門分野の授業で、日本語で研究発表をしたり、討論したりすることに自信があった。	3.06	3.58	.987	1.035	-2.728	128	.007
	11	私は自分の専門分野の本や資料を読んでも分からないので困っていた。	3.31	2.63	.907	1.213	3.201	128	.002
	12	私は日本語で自分の意思を十分表現できない。	3.07	2.65	1.068	1.12	1.983	128	.051
二	1	私は学校に何でも話せる日本人学生の友達がいた。	2.76	3.30	1.257	1.13	-2.345	128	.021
	14	私は、日本人学生と一緒に集団活動(パーティー、ダンス、ピクニック、ミーティング、スポーツ等)をする機会が少なくて不満だった。	2.66	2.10	1.282	1.057	2.584	128	.011
三	6	私は日本人の特性が理解できる。	3.60	3.95	.818	.783	-2.28	128	.024
	10	日本の生活にすっかり適応してしまい、台湾文化を認められなくなったことに危機感を抱いた。	2.30	1.88	1.065	1.114	2.071	128	.040
四	6	家賃が高くて生活が苦しかった。	3.11	2.55	1.165	1.15	2.541	128	.012
	7	留学期間中、私は経済的にとても困っていた。	2.91	2.40	1.088	1.194	2.399	128	.018
	9	留学期間中、日本のかわいいものやかっこいいものを、経済的な理由で買えないことがよくあった。	3.58	2.98	.936	1.097	3.211	128	.002

五	2	留学期間中、よく医者に見てもらった。	1.59	2.00	.873	.784	-2.555	128	.012
	3	留学期間中、調子が悪くなり、医者に診察してもらったにもかかわらず、原因が判明しなかったことがある。	1.23	1.55	.542	.749	-2.048	128	.019
	6	留学期間中、よく眠れなかった。	1.86	2.23	.955	.947	-2.041	128	.043
	7	留学期間中、よくホームシックにかかった。	2.18	2.80	.972	1.20	-3.109	128	.002
六	2	留学期間中、気晴らしに外出することが多かった。	3.96	3.38	.873	1.05	3.28	128	.001
	3	留学期間中、よく自分の趣味に興じていた。	4.12	3.70	.846	1.02	2.464	128	.015
	8	留学期間中、宗教に頼ることでストレスを解消しようとしたことがある。	1.43	1.90	.862	1.172	-2.261	128	.028

私費の人は留学期間中「勉強する気」があまりなく、さほど「研究や勉強に一生懸命努力して」おらず、「自分の専門分野の授業で、日本語で研究発表をしたり、討論したりすることに自信が」なく、「自分の専門分野の本や資料を読んでも分からないので困って」おり、「日本語で自分の意思を十分表現できない」という第一項目での適応問題があった。

第二項目の「対人関係」に関しては、私費留学生は「学校に何でも話せる日本人学生の友達が」いなかったし、「日本人学生と一緒に集団活動（パーティー、ダンス、ピクニック、ミーティング、スポーツ等）をする機会が少なくて不満だった」。

第三項目の「文化適応」については、奨学生には「日本人の特性が理解できる」と思う者が多いのに対して、私費留学生では「日本の生活にすっかり適応してしまい、台湾文化を認められなくなったことに危機感を抱いた」と思う者が多い。

第四項目の「日常生活への適応」を見ると、留学期間中、「家賃が高くて生活が苦しく」て、「経済的にとても困って」おり、「日本の

かわいいものやかっこいいものを、経済的な理由で買えなかった」と思う比率は、当然のことであるが奨学生より私費留学生の方が高いことが分かる。また、彼ら（私費留学生）はストレス解消（第六項目）の手段として「気晴らしに外出」、「自分の趣味に興じること」を多く用いた。

第五項目によると、奨学生は私費留学生に比べ、留学期間中、「よく医者に見てもらい」、「調子が悪くなり、医者に診察してもらったにもかかわらず、原因が判明しなかったことが」あり、「よく眠れ」なかった、「よくホームシックにかかった」という度合いも高かったことが分かる。

9、宗教の有無

今回の調査範囲対象者は、大半（85 人）がとくに宗教を持っておらず、何らかの宗教を持っている人の内訳は仏教（30 人）、道教（7 人）、ローマカトリック（2 人）、キリスト教（5 人）、その他（1 人）であった。T 検定を行った結果、表 11 の通りである。

表 11　台湾人留学生間適応状況比較（宗教要因）―領域別 T 検定

項目	問	項目内容	M		SD		T	DF	P
			宗教なし (N=85)	宗教ある (N=45)	宗教なし (N=85)	宗教ある (N=45)			
一	10	私は自分の専門分野の授業で、日本語で研究発表をしたり、討論したりすることに自信があった。	3.08	3.47	1.07	.894	-2.56	128	.042
二	6	私は、チューターや先輩に気楽に話しかけることができなかった。	2.47	2.09	1.053	.949	2.033	128	.044
	13	日本人の友達がよく私の家へ遊びに来た。	2.20	2.71	1.232	1.16	-2.295	128	.023
四	7	留学期間中、私は経済的にとても困っていた。	2.92	2.44	1.167	1.04	2.285	128	.024

	14	留学期間中、台湾の家族のことをいつも気にかけていた。	2.39	2.87	.892	.959	-2.402	128	.018
五	7	留学期間中、よくホームシックにかかった。	2.20	2.70	.998	1.17	-2.562	128	.012
六	4	留学期間中、ストレス解消のために運動することがよくあった。	2.54	3.02	1.03	1.09	-2.477	128	.015
	8	留学期間中、宗教に頼ることでストレスを解消しようとしたことがある。	1.32	2.07	.694	1.25	-3.726	128	.000
七	8	帰国後、台湾人の考え方や行動様式(たとえば、時間感覚やサービスの態度)に慣れないと感じる。	3.55	4.00	1.31	.953	-2.221	128	.028

何か宗教を持っている人（45 人）は持っていない人（85 人）より「自分の専門分野の授業で、日本語で研究発表をしたり、討論したりすることに自信があり」(第一項目)、「チューターや先輩に気楽に話しかけることができた」うえ、「日本人の友達がよく家へ遊びに来た」が、留学期間中「台湾の家族のことをいつも気にかけて」おり（第二項目)、「よくホームシックにかかり」(第五項目)、「ストレス解消のために運動」し、「宗教に頼ることでストレスを解消しようとし」、「帰国後、台湾人の考え方や行動様式（たとえば、時間感覚やサービスの態度）に慣れない」と感じている（第六項目)。

それに対して、宗教を持っていない人は持っている人より、「経済的に困っていた」。

四、おわりに

今回の調査で、台湾人留学生は日本留学を肯定的に見ているが、留学期間中だけでなく、帰国後にも様々なカルチャーショックを受けていることが分かった。中でも人生経験が浅い若年層、性格が比較的繊細な女性、金銭に恵まれていない人、頼りにする信仰を持た

ない人などの場合、特定の状況に顕著な不適応を来すことがある。本稿の調査結果は、将来日本留学に行く予定のある台湾人（さらには他国の人）が事前に心の準備をする際に大いに参考になると思われる。

参考文献

英語文献

Colman Andrew M（2007）『Oxfrod Dictionary of Psychology』上海外語教育出版社

日本語文献

アークアカデミー・高野真司・藤沢昌弘・鈴木紳郎（2002 新版）『合格水準 日本語教育能力検定試験 用語集』凡人社

上原麻子（1988）「留学生の異文化適応」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』広島大学教育学部、PP.111-124

江村裕文（1993）「留学生の異文化適応」『留学生の異文化適応』法政大学教養部紀要、PP.1-11

大西守（1992）『異文化ストレス症候群：人はなぜ異国で病むのか』バベル・プレス

倉林るみい・稲村博・荒木均他（1984）「筑波大学外国人留学生の適応状況：カルチャーショック現象の実態調査」『筑波の環境研究』8、PP.33-39

高見澤孟監修（2004）『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』アスク

飛田良文編（2001）『日本語教育シリーズ＜第 1 巻＞ 異文化接触論』おうふう

星野命（1980）「カルチャー・ショック」『現代のエスプリ』161、PP.5-29

松原達哉・銭哲婷（1996）「台湾からの高卒留学生の異文化適応についての研究」『立正大学文学部論叢』103、PP.63-90

森岡清美・塩原勉・本間康平（1993）『新社会学辞典』有斐閣

読売新聞社（1874 年～2009 年 12 月 31 日）『読売新聞』
『情報・知識　imidas』（ニッポニカ）、ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）、入手先＜http://www.jkn21.com＞
『日本大百科全書』（小学館）（ニッポニカ）、ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）、入手先＜http://www.jkn21.com＞
独立行政法人日本学生支援機構
http://www.jasso.go.jp/kouhou/press/press091224.html

中国語文献

石村貞夫著・陳耀茂訳（2005）『類別分析的 SPSS 使用手冊』鼎茂圖書出版股份有限公司
珍・貝克・米勒（Jean Baker Miller）著・江慧君訳（1992）『新女性心理學』（原典：Toward a new psychology）桂冠圖書股份有限公司
島田一男著・李揚訳（2008）『惡女心理学』新雨出版社
温世頌（2006）『心理學辭典』三民書局
奥修（OSHO）著・沈文玉訳（2005）『女性意識—女性特質的慶祝與提醒』（原典：Female Consciousness-Female Experience）生命潛能文化事業有限公司
戴維・賈里，茱莉婭・賈里（DANID JARY ＆ JULIA JARY）著・周業謙・周光淦訳（2005）『社會學辭典』（原典：HAPPER COLLINS DICTIONARY ）貓頭鷹出版社

謝辞：本研究におけるアンケート調査にご協力くださった方をはじめとして、二、（一）で提示したパイロット調査の段階でいろいろアドバイスをしてくださった専門家の方々（銘傳大学統計学科の王智立氏、銘傳大学教師養成センターの謝曜任氏、銘傳大学スクールカウンセラーの黄啓翔氏、国防医学院公衆衛生学科の周雨青氏、他1名匿名希望）に厚く御礼申し上げる。また、SPSSに関しては開南大学応用日本語学科の鄭加禎氏、銘傳大学統計学科の陳泰達氏にご指導いただいた。ここに記して感謝する。